

Ⅱ七〇年春期斗争の総括Ⅱ

七〇年三月、わがアナキスト高校生協会は、過去における自己の政治主義とその根拠を自ら切開し超克していくという、かつてない課題を背負う意気に燃えたつ数名の同志によって準備された。そして五月中旬に至って正式にA H A 第一回総会を開催し、この間に加わった多くの同志をも含めて、六時間におよぶ白熱した討議の中から七議案を一部修正の上採決した。本総会においてA H A は組織運動の基礎を打ち固めたのである。五・三一斗争の後に第二回総会を開催して、この間の総括と共に六月斗争の基本方針を確定し、更に六月斗争後は第三回総会を開催し、これを総括すると共に長期展望を設定したのであった。本文では準備過程と長期展望、そして大部分の総会内実をのぞいて記述することとした。ただし総会内実の若干は最後に「資料」として掲載しておくことにした。

「思想斗争としての総括」

まずもってA H A は考える集団なのである。どこかで誰かが「行動する党」ってなことを言っていたけど、無思慮に行動するなどケガのモトであって、ケガの功名でモトがとりもどせるといったものではないので

あります。A H A は思想集団なのであります。ですから、技術上の問題は、すぐれて組織上の問題であり、根本的には主体の思想上の問題である、と考えるわけであります。ここでは僕たち自身の総括をしますんで、これを読んでも君、そう君自身のことは全く配慮の外にあるのです。ただ君が君の内発性において、僕たちの志向性にすぐれて近ければ、熟読熟考の上で批判されることは、僕たちにとって貴重なことですから、陰口などいわずに是非面と向って挑戦して下さい。僕たちの嫌いなものは政治と陰口なのです。政治と陰口、要するにこれだけのことでデカイ顔してる野郎は、絶対に僕たちの手で息の根を止めてやる。そうしないうちは夜もねむれないくらい僕たちは執念深いのです。

では考えるA H A が何を考えてきたのかということに入ります。ツボをおさえてサツと入ります。(カッコイイと思ったら君のまがい、実はじつにカッコワルイのであります。) わがA H A はこの間、まずもって主体内部の自己切開を状況とのかかわりの中において追求していく志向性を保持した。従って、革命観そのものをほりさげていくと共に、少しずつではあれ革命の困難性がなんであるかが見えてきた。我々は日常生活がなんであるか、とりわけ我々自身が何物であるのか、といったところから考え始めたのであって、日常生活の変革を語るよりも、天下国家を論じることのほうが意義が高いのだ、といったマルクス坊やの発想とは根本から異質である。日常生活を対象化して考えるということは非常にクルシイことであって、何故なら自己の俗物性が見えて見えて丸見えで、それこそいてもたってもいられないのだが、それにもかかわらずわがA H A では同志相互で、実に傷口を見つけあってはイタブツタので

ある。このことの結論は、革命とは日常生活の変革を指すのだということであった。つまり革命とは、現代社会の「政治―関係―構造」を、無政府共産社会へ向けた「評議―関係―構造」へ解体再編すること、日常生活構造の革命なのである。我々はこの間において、状況斗争へのかかわりにおいて、主として技術水準において、マルクス坊やたちに対してあらゆる機会をとらえては、徹底的にイジワルくたいたってきたのだけれども、思想水準における批判もこの機に記述しておかねばなるまい。実に我々をスケジュール斗争にかかわらせたのは、マルクス坊やたちがおったればこそなのであるから。プロ独をめざした運動というものは、主体的にも社会的にも「政治―関係―構造」の枠内にあるのだが、政治とは支配し統治することであるから、同時に支配され統治されるものが一方であることは必然というものだ。つまりプロ独というドギツイ名の政治―権力―国家を志向する者は、権力奪取してこの奪取した権力を自己のポケットに入れるのだ。ポケットに入れられた権力は錢みたいなもので、一度取ったら死ぬまでフヤスことは考えても、バラマクことなど考えもおよばないという性質のものであるが、このことは現代ロシアや現代中国の官僚専制政治体制を見れば明白であり、そもそも権力をなくすのに権力を、国家をなくすのに国家を、政治をなくすのに政治を自己のポケットに入れてからでなくては手ばなせないというのだ。権力は本質において集中性をもつから、このことはスターリン万歳、毛沢東万歳へ直結するのだが、マルクス主義者のいう弁証法とは便利なもので、白を黒といくるめることのできる論理である（都合によって白は白だといったり、白は黒だといったりするのです）が、ただ一つ致命的弱点を

明らかにしておくならば「止揚」とは何かという問いに、マルクス主義者は回答できない。実に「止揚」とは思考停止の合図であって、「信心」に通じる心的作用をおよぼすのである。こんな宗教に魂を売り渡すのはよほど主体性に自信がないのである。彼らにとって実在するのは時間において必然としての歴史であり、空間においてはこれまた必然としての社会であって、主体として実在しているはずの人間は彼らが唯一の根拠としている「論理」の単なる歯車でしかないというのだ。神と国家のかわりに歴史と社会というわけだが、これは見えずいたうそです。勿論、人間は関係的存在ですから当然にも歴史や社会と関係しますが、歴史や社会は関係としてあるのであって、実在する根本は一人一人の人間なのです。何か強弱の置き方の違いだけのように思われるかも知れないが、この違いが実は天と地ほどにも異なった思想を生んだ根拠なのです。方や論理至上主義のマルクス主義を含めた権力主義思想であり、勿論、方や絶対自由主義「アナキズム」というわけです。マルクス主義者はよく究極目標は同じだからというようなことを言いますが、目的と背反した方法を用いることに何んの矛盾も感じないという、全く錯乱した頭脳の持主なのです。彼らはヘーゲルを逆立させたといいますが、これは本当のこと、ヘーゲルは目的とはそれに至るために用いられた手段の総和であるといいましたが、マルクス主義者はこれを逆立させて、実に目的とは目的に背反した手段の総和であるとしているようです。我々には理解できないことです。彼らは石をくだくにコンニャクを一体何回ぶつけるのでしょうか、そんなことはない、やはり我々と同じです。にもかかわらず論理信仰というのは恐ろしいもので、「国家―関係―構造」を別

の関係―構造によって廃絶するのではなくて、同じ関係―構造のプロ独なる政体で国家―関係―構造を「死滅」させるのだそうです。馬鹿じやなかるかノやはりマルクス坊やお馬鹿さんなのです。これが結論でした。原理が異質ですからケンカにもならないと考えればそれで終りで、我々は我々の原理に立脚した組織と技術を用い、なければ開発してこれを用いて先へ進まねばならない。組織と技術に関しては、さしあたり

「資料」に掲載した「思想運動の組織方法」を参照して下さい。

我々は日常生活構造の革命を推進するために反帝社会斗争を提起しつつ、まず自己の関係基軸としてある「家」に対してする闘いをいどんだのであるが、「家」は家庭であり家族であって、家族帝国主義ではありません。正確には「家」は帝国主義だと考えますが、とにかくこれを解体再編するために全同志は孤軍奮闘したのです。現在のところは、最悪の場合で黙認、最良の場合でシンパという段階であって、遅々として思うようには進展していませんが、家出というような脱走兵は出ずに未だ持続して戦闘中というところなのです。この故に我々の総括は全然カッコイイどころではなく、実にカッコワルイわけですが、必ずや両親兄弟を目的意識的な戦士へ養成すべく、普段養成されていることから考えてもこれは一種の義務みたいなものですが、断固貫徹すべく今日も考え続け闘い続けている。ということでの節の総括ということにします。主体的には依然として自己形成の過程にあるというわけです。

「原点斗争をめぐる総括」

さて我々がA H Aという組織性を媒介としてきた運動の中で、特に固執した領域に原点斗争があるわけだが、そもそも原点斗争は個別斗争な

る枠組において考えていたのではなく、反帝社会斗争の不可欠な一環として目的意識的に設定されたものである。反帝社会斗争は、マルクス主義諸派の「政治斗争―経済斗争（個別斗争）」の枠組と、この枠組を生かした思想的根柢を突破した地平において、これ自体が社会革命運動の部分構成するものとして位置付け、その内部の基軸として原点斗争を設定したのである。従って、我々はマルクス主義的な換言すれば政治革命主義的な運動構造を、「状況斗争」という言葉において解体再編されるべき対象として設定した。（政治）状況を基準としてくまれる闘いの構造を、これを解体再編して反帝社会斗争へ結合させていく斗争、これを我々は状況斗争ということで位置付けたのであった。従って我々は現実には、原点斗争を基軸とした反帝社会斗争と状況斗争という抽象的内実を、総合した運動構造においてこの間の闘いに媒介的に介入し、あるいは媒介し主体的に斗争設定を行ってきたわけである。この典型が七〇年五月三十一日斗争なわけで、この他にも種々の「変形」もあったが省略しておくことにする。さてこの五・三一斗争をA H Aとして総括してみれば、それ自体の意義を手前ミソに列挙することは略して（五・三一ピラ参照）、暴露された限界とその主体的根柢を明確にしておくかねばならないと考える。第一に、それまでの各学内集会の積み上げの上に当日の各地区集会を設定したが、実際には北摂全斗連が設定しえたのみであり、しかもこれすら無届集会デモを貫徹することができず、官憲に追いまわされてチョンの間の集会で終ったということであり、その根底的限界は、結集したグループ各々においてスケジュール斗争的にしか把握されていなかったが故に、内実ある各学内での取り組みが二、三を

除いてなかったということであり、裏をかえせば我々の主体を媒介にしたヘゲモニーが極めて狭いところではか貫徹しえなかったところにあつたといえる。その結論を組織拡大へと短絡させるには、我々はあまりにも自己形成至上主義的であつたし、現在のにもそうであるのだが、我々は組織拡大という技術主義的な解決方法よりは、より強固な自己形成とこれを通した運動過程でのヘゲモニー獲得に注意を向けたのである。このような志向がどう展開されたかは次節で記述する。さて第二に、集団で発生した反帝高評ヘゲモニー下にある日高全斗委の政治主義は他へ波及せず、彼らは集会発言をするだけで途中から脱落し、デモへも不参加ということになり、結局は五・三〇セクト野合集会へも行ききらず、又、五・三一高共斗連合集会にもかかわりきれないといった、どちらにしてもブサイクな姿をさらしたわけであるが、この反帝高評なるマルクス馬鹿は、イデオロギーが違うという理由にならないケチツケで斗争から逃亡しきつたわけである。我々は反帝高評の日高全斗委に対するヘゲモニーを解体することができなかったわけだが、その根拠は我々が先へ進みすぎており、反帝高評が他高校生セクト以上に遅れているところにある。それは彼らが積極的にゲバをも辞さぬ決意をも含めて、何一つ集会へ介入しえなかった事実において明白である。第三に、デモの過程でも明らかになつたように、各々の高共斗において斗争の位置付けが異なつていたが故に、大局的に安保スケジュール斗争派と五・三一斗争派に二分されたということである。この点においてこそ我々は、この間の準備過程、直前会議における不十分さを含めて自己批判せねばならないと考える。確かにこれまでのスケジュール斗争と異なり、原点斗争

を反帝社会斗争として結合するという、それ自体極めて困難な斗争ではあつたが、かかる事態を派生させた根拠を技術的にではなく、組織的により思想的に自己批判して、これを突破していく主体的内実の形成は、我々一人一人のそしてA H Aとしての責任であることが明確にされたのである。以上でこの節を終えるが、「資料」に掲載した「個別原点斗争にあたつて」及び「北部地区二校連絡会議アピールの抜粋」を参照されたい。

〔状況斗争をめぐる総括〕

さて、本パンフに収録したピラの大半は、この領域にかかわるものであるが、これらのピラは一定の影響をかなりの範囲で闘う高校生の中に与えたと言ひ切ることができる。春期斗争の集約であつた六・二三における、うつば公園での一千四百余名の高校生大統一集会是、その数において大阪城公園に行った代々木民青系高校生と互角であり、同じうつば公園での大学全共斗系集会、反戦青年委系集会におとらぬ集会の発現としてあつた。この時にはすでに我々がしつこく主張してきた最低限のことで、つまり高共斗連合集会・行動ではセクトの旗を出すな、発言したいグループには全部発言させる等のことは貫徹されており、弱小諸セクトがセクトとして、又各高共斗におけるヘゲモニーとしても、全くといってよいほど登場しえなかつた。だからといって別に我々のヘゲモニーが貫徹していたというわけではない。ただ少くとも八派系弱小諸セクトに対する「ヘゲモニー」は貫徹していたというわけである。従つてどこのセクトも「領導」したとか「先頭に立つた」とかは、絶対に言えなかつ

たし事実言うことができないうわけである。彼らが我々の立場にいれば、それこそ得意満面で大言壮語していたところであろうが、我々はそんなことに関心はないし、そもそも六・二三における一千四百余名の斗う高校生の基調は、確かに民青に比較すればよりすぐれてはいたといえるが、一言で言ってしまうえばそれは、斗う高校生の一日だけの否一晩だけの楽しい反安保まつりともいうようなものであって、たのしいうにおしやべりしニコニコ笑うといった、日常の学園内外では味わえない「解放感」を楽しんでいた、というものである。我々はこのことが全く無意味なものであるとは思わないし、むしろ逆にこの非日常的な時場の持つ意味と、その精神に与える影響とを深く考えるものである。この時場においてそれこそ馬鹿げたセクト主義や政治性を発露させた部分は、勝手に急速に全く完全なまでに自滅してしまったのである。例えば反戦高協は、三〇名でI高全共斗を軸として大統一集会にもぐりこんだが、斗う高校生の「大統一集会」の中では、反戦高協の旗を上げることでもせずに、大海の中の小岩礁よろしく独自集会をやったものの、持続できずに解体してしまった。他の八派系セクトはかかる試みをするだけの力量もなかったのだが、もっとミジメだったのは、高校ベ平連と革マル派反戦高連であった。これまでノンセクトの代表ヅラをして、八派のとりもち役をつとめてきたこのノンセクト・セクトは、自己の登場する余地がないため崩壊しつつし、各メンバーは自分の高校の旗を見つけてそこへ行くか、統一集会参加であるが、それともあくまで高校ベ平連の旗をもって、市民ベ平連の方へ二軍よろしく行くしかなかったのである。さて我が革マル派II反戦高連はどうしたかといえば、三、四校ばかりの斗

争委員会を組織して、ついでに反戦高連の旗とおそろいのヘルメットをかぶって、六〇名弱で登場し、大統一集会へ何を血まよったか共斗を申し込んできたのだが、「共斗？参加と違うんか？」との一言でガツクリして、どこへともなく消えてしまったのである。反戦高連の諸君よノセクト旗をまきさえすれば、集会へ参加し、各斗争委員会名で、それこそ好きなことをシャベクルことができたのですよ。こんなことは五・三一集会で実証済みのはずではなかったか？ 全くセクト主義・売名主義というものはしょうがないもので、セクト旗を下すくらいなら参加しないで、つまり一千四百余名の高校生から「自由」であって、旗を見せて名を売った方がよいというのだ。こんなくだらぬ旗はいくら大安売りしても、それこそ誰も買いはせぬのですよ。君たちは売名屋にふさわしく、「われわれはこの六・二三統一行動に高校生戦線における最大部隊として登場した」なんて機関紙上で言っていますが、一体誰がこれを信じますか？ 正確に言えば、八派系弱小諸セクトは結局においてセクトとして登場することができず、各高共斗の一員として参加していたのであり、従って新左翼諸セクトとしての水準においていうなら、最大なものにも比較する対象がなく、名譽にも唯一の部隊だったのであり、斗う高校生の水準においていうなら統一集会からハミダした最小の（高校ベ平連の方が彼らより若干多いから）部隊だったのです。この事実を知っている上でかく言ったとすれば、反戦高連は売名のためには平気でウソをつく、ウソ八百（現実には六〇弱）集団であり、大衆から「自由」で運動とは無縁な売名サークルということになります。ホントあきれました。厚顔無恥とはこのことなり。大衆運動の高揚とは全く良いものです。六・二三

